

日本発祥のスポーツを行う外国人選手の競技に対する認識

—カナダの男子新体操選手および指導者を対象とした PAC 分析—

野田光太郎*

秦美香子*

抄録

本研究では、男子新体操選手および指導者を対象とした PAC 分析によって個人の競技に対する態度構造を明らかにすることを目的とする。

2000 年代前半に、日本発祥のスポーツであり日本国外の競技人口が少ない男子新体操の国際的普及を図るという目的をもって、日本人男子新体操選手らが指導者として 6 カ国に派遣された。当時指導を受けた各地の選手らは、その後事業終了とともに指導者が不在となり、基本的には競技を継続することが出来なくなった。しかしカナダでは、上記の事業によって伝えられた日本の男子新体操と、中国などで行われている武道の組み合わせによって構成された MartialGym という独自のプログラムが実施されており、他に類のない展開が見られる。そこで本研究では、MartialGym の指導者が、日本の男子新体操をどのような競技として認識しているのか、日本の男子新体操の国際的普及に対してどのような考えをもっているかを分析した。

本研究の方法は、PAC 分析（個人別態度構造分析）を用いた。対象は、男子新体操選手として 2005 年に第 58 回全日本新体操選手権大会に出場した選手 A 氏、および、日本が男子新体操の国際的普及活動を構想し始めた 2000 年前後から現在に至るまでの長期にわたり、カナダで男子新体操に指導者の立場から関わってきた B 氏であった。両者とも、調査時には MartialGym の指導者でもあった。

PAC 分析の結果、2 名とも、男子新体操を独自性に満ちた競技として理解しており、競技の独自性が維持されるべきだと考えていた。何を競技の独自性とするかについては、力強さなどのイメージが挙げられたが、とくに B 氏は独自性が時代の流れの中で失われつつあると認識していた。また両者とも、男子新体操は男性でも女性でも参加可能な競技になるべきだと考えていた。さらに、演技に含まれる技や動きがどれもハイレベルすぎることも問題として認識されており、もっと一般的な（grassroots）レベルで行われる競技として参加可能性を高めることが必要だと考えていた。

とくに B 氏は、日本側が行った競技の普及活動に対する問題意識が高く、競技規則などの情報公開に消極的であること、競技の認知度を高める取り組みがパフォーマンスを観客に見せるイベントに偏っており一般向けの参加プログラムなどがあまり考慮されていないことなどの日本側の姿勢を、課題として捉えていた。

以上の分析結果からは、競技が国際化する過程において、競技の特徴や魅力に対する見方が共有され得るかどうかという問題だけでなく、国際的な普及を目指して行われる取り組みの方法をめぐる認識のずれや意見の相違という問題も重要となることが示唆される。

キーワード：競技の国際的普及，PAC 分析，男子新体操

* 花園大学文学部 〒604-8456 京都府京都市中京区西ノ京壺ノ内町 8 - 1

The Athletes' Perception of Foreign Origin Sport

—PAC Analysis of Interview Data

of Canadian Male Rhythmic Gymnast/Coach—

Kotaro Noda *

Mikako Hata*

Abstract

In this study, we aim to clarify the nature of attitudes of male rhythmic gymnasts and instructors towards this sport via PAC analysis.

Rhythmic gymnastics is a sport originating in Japan with few competitors outside of Japan. In the early 2000s, male rhythmic gymnasts in Japan were sent to six countries as instructors with the aim of promoting men's rhythmic gymnastics globally. Athletes in various regions received instruction in the sport but then became absent after completion of the project, resulting in inability to continue the sport. However, in Canada, a unique program named MartialGym, which consists of a combination of the Japanese men's rhythmic and Chinese martial arts, is now underway. As such, in this study, the data of two interviews with instructors at MartialGym are analysed to consider how Japanese men's rhythmic gymnastics are recognized, and what kind of thoughts those informants may have with regard to its global spread.

As a result of the PAC analysis, it was found that both subjects were aware that men's rhythmic gymnastics was a unique sport, and the subjects believed that the identity of the sport should be maintained. Regarding what was seen as the unique aspects of the sport, characteristics such as strength were mentioned, but in particular, Informant B stated that the sport's identity was being lost over time. Both subjects believed that men's rhythmic gymnastics should be a competitive sport welcoming both male and female players. In addition, the subjects recognized that the high level of skills and movement techniques needed for the sport could be a problem, and they believed that holding "grassroots" events designed for beginners may be necessary to increase participation and lower barriers to entry to the sport.

The analysis results described above present not only the question of whether viewpoints concerning the characteristics and attractiveness of the sport can be transmitted in conjunction with the process of internationalization, but also suggest that the issue of differences in the recognition of internationalization efforts and associated opinions is also important.

Key Words : the global diffusion of sport, male rhythmic gymnastics, PAC (Personal Attitude Construct) Analysis Method

* Faculty of Letters, Hanazono University, 8-1 Nishinokyo-Tsubonouchi-cho, Nakagyo-ku, Kyoto 604-8456

1. はじめに

本研究では、男子新体操選手および指導者を対象とした PAC 分析によって個人の競技に対する態度構造を明らかにする。

スポーツ競技団体にとって、競技が国際的に普及していることは必須の課題の一つである。競技レベルの向上を評価する一般的な指標として用いられやすいのはオリンピックなど国際的な大会での成果であるため、国際化されていない競技は評価の基準すら定めにくく、政策の対象となりにくいからである(齋藤 2011)。こうした状況の下、ニュースポーツと呼ばれる 20 世紀後半以降に登場した各競技や、従来の競技から派生した女子 7 人制ラグビー(和田 2012) など世界的に行われているとはまだいえない各競技は、競技団体などによって熱心な普及活動が行われてきた(一例は町田 2014)。

本研究ではそのようなスポーツ競技の一例として、男子新体操に注目する。男子新体操はデンマーク体操などをもとに日本でつくられた競技と考えられており(野田・秦 2015)、世界選手権大会などの国際試合は現在開催されていない。

この状況を改善し、競技の国際的普及を図るという目的をもって、2001~2006 年度頃、日本体操協会男子新体操委員会は、日本人男子新体操選手らを指導者として 6 カ国に派遣した。派遣の内容は、現地の体操選手や一般市民を対象に男子新体操を紹介し、指導を行うというものであった。その成果として 2003 年および 2005 年に国際大会が日本で開催されているが、派遣事業自体は運営費の不足などの事情により中断された(野田・秦・菅・間野 2017)。

当時指導を受けた現地の選手らは、その後事業終了とともに指導者が不在となり、基本的には競技を継続することが出来なくなった。しかしロシアやカナダなどでは、少数ながら現地の競技者や関係者が練習を継続している。とくにカナダでは、上記の事業によって伝えられた日本の男子新体操と、中国などで行われている武道の組み合わせによって構成された MartialGym という独自のプログラムが実施されており、他に類のない展開が見られる。

そこで本研究では、カナダの事例に焦点を置き、日本体操協会男子新体操委員会による施策からは自立して現地で根付いた男子新体操が、現在ではどのような競技として行われているかを、現地の選手および指導者を対象として調査する。

2. 目的

男子新体操は日本以外の競技人口が極めて少なく、国際レベルでの競技規則が未整備である。今後、

国際化に伴って競技の内容や規則が変化していくことが推測される。その変化をもたらす要因のひとつとして、競技に対する認識の文化的相違を挙げることが出来る。男子新体操は日本国外での競技人口の少なさから、現時点では競技観の文化的相違や異文化摩擦について検証できる段階にない。しかし、日本側が計画した競技の国際的普及事業が頓挫した後に、その計画から自立して発展している事例について分析することは、今後男子新体操に限らずスポーツ競技が国際的に普及する際に生じる文化摩擦や課題を析出する問題に取り組むための足がかりとなる。

そこで本研究では、カナダで男子新体操を元にした MartialGym を独自に行っている選手や指導者が、日本の男子新体操をどのような競技として認識しているのか、日本の男子新体操の国際的普及に対してどのような考えをもっているのかを、インタビュー調査によって明らかにすることを目的とした。

3. 方法

本研究の方法は、PAC 分析(個人別態度構造分析)を用いる。PAC 分析は、(1) 契約関係、(2) 連想順位と重要順位の測定、(3) 類似度距離行列の作成、(4) クラスタ分析、(5) 被験者による解釈と報告、その記録、(6) 総合的解釈という手順で行われる。この手順を通じて、個人ごとに態度やイメージの構造を分析する方法であり、統計学的手法と事例記述的手法の両者が包含されている点が特徴である(内藤 1997=2002)。

この方法は、個人や単一集団の独自性や特有性の全体構造を捉えるためのものであり、事例を直感によってではなく操作的科学的に分析するために開発された(内藤 1997=2002: 2-3)。PAC 分析は、個人的な経験や心理状態だけでなく、経験が行われる場や関係性を理解するといった目的に至るまで、幅広い問題意識に適した手法とされる。本研究では男子新体操に対する選手および指導者の個別的な認識を分析するため、この方法を採用した。

対象は、男子新体操選手として 2005 年に第 58 回全日本新体操選手権大会に出場した選手 A 氏、および、日本が男子新体操の国際的普及活動を構想し始めた 2000 年前後から現在に至るまでの長期にわたり、カナダで男子新体操に指導者の立場から関わってきた B 氏であった。B 氏は男子新体操と武道をもとにしたプログラムの MartialGym を開発し、カナダ・バンクーバー市近郊で複数の教室を開催している指導者であり、A 氏も 2016 年夏までは MartialGym のコーチとして指導にあたっていた。

面接方法は対面での半構造化インタビューを用

いた。面接は野田が2016年9月6日～13日にカナダ・バンクーバー市で実施した。上記の手順に従って(1)～(5)を当該期間中に行い、帰国後に2名の筆者によって(6)を行った。各氏の発言をより正確に理解するために、面接は日本語－英語の通訳を介在した。A氏およびB氏の発言は英語で行われ、日本語に通訳された。調査データは録音し、筆者らによる総合的解釈は英語による元の発言を使用して行った。

分析の手順は内藤(1997=2002)に従って、以下の通りに行った。

(1) 契約関係とは、インフォームド・コンセントのことである。面接の前にメールで研究の背景や目的を説明し、調査への協力は事前事後のいかなる段階でも自由にやめられること、調査への協力・非協力にかかわらず個人の不利益は生じないこと、個人情報取り扱いなどを伝え、了解を得た上で面接日程を決定した。また面接当日に同様の内容を書面によって改めて伝え、署名を受けることでインフォームド・コンセントを得た。

(2) 連想順位と重要順位の測定では、男子新体操に関して連想したことをそれぞれ自由にカードに書き出してもらい、重要度順に並べ替えてもらった。また、個々の記述内容についてプラス(+）・マイナス(-)・どちらでもない(0)のいずれの

イメージをもつかを答えてもらった。

(3) 類似度距離行列の作成では、重要度順に並べ替えられたカードの行列を見てもらい、全てのカード同士の距離を1(最も近い)～7(最も遠い)の間で答えてもらった。

(4) クラスタ分析は、下位技法としてウォード法を用い、SPSSによって行った。析出されたデンドログラムは図1、図2に示した。図の中で各カードの右に書かれた数値は重要度順位を表している。A氏のクラスターに関しては切断距離を2.5付近として7分割すること(図1)、B氏のクラスターに関しては切断距離を3付近として7分割すること(図2)を実験者による試案とした。

(5) 被験者による解釈と報告では、最初にデンドログラムを確認してもらい、切断距離を尋ねた。次に、各クラスターのまとまりごとに、各カードの意味・意図、各カードがなぜプラス/マイナス/どちらでもないイメージをもつと感じたか、クラスターのまとまりに名前を付けるとしたらどのような名前が適していると思うか、を尋ねた。その上で、全体の構造について考えることを尋ねた。

記録は、音声をICレコーダーで録音し、同時に文字での記録を行った。

(6) 総合的解釈は2名の筆者によって行った。被験者による解釈の他に、被験者自身の発言があま

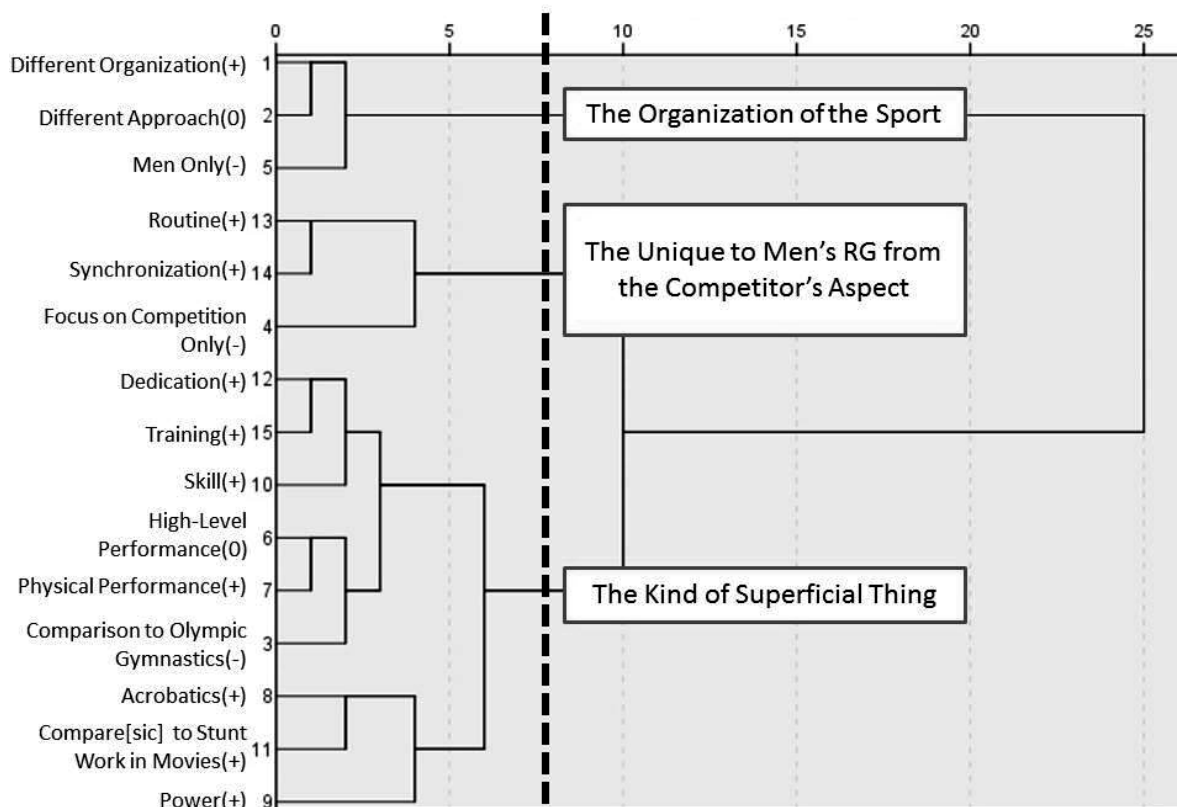


図1 A氏のデンドログラム

り得られなかった重要度順位などの情報にも留意して解釈を行った。

4. 結果及び考察

4-1. 被験者によるクラスター構造のイメージや解釈の報告 (A 氏)

A 氏はクラスターを8付近で3分割した (図1)。

クラスター1の解釈

クラスター1を構成する項目は、Different Organization (異なった組織化)、Different Approach (異なったアプローチ)、Men Only (男性のみ) の3項目であり、A 氏はこのクラスターを The Organization of the Sport (競技の組織化) と名付けた。

なお、「組織」は日本体操協会など個別の組織集団を指しているのではなく、整理されてまとまった体系という意味で用いられていると考えられる。たとえば「異なった組織化」とは、日本の男子新体操が他の国にはない独自の競技だという意味である。A 氏はこの項目について、以下のように説明した。

There is a global gymnastics, like you can see in the Olympics, practiced everywhere, in other countries, but born in Japan has..., you know, it is called “the Japanese men’s rhythmic gymnastics”. Other countries don’t have [that kind of brand]. (オリンピックで見られるような、他の国でもどこでも行われているグローバルな体操というものはあります。しかし日本で生まれたその競技は、「日本の男子新体操」と呼ばれている。他の国にはそういうものはないです)

「異なったアプローチ」に関しても同様に、’Same origin, based on gymnastics, but different.’ ([男子新体操は] 体操を基礎としており、起源は [他の体操と] 同じですが、でも違います) と語っていた。「男性のみ」は競技が男性選手のみを対象としていることを指している。

「競技の組織化」に含まれている3項目が「+」「0」「-」とされたことについてそれぞれ尋ねたところ、「異なった組織化」は *It outstands but not in a bay way* (傑出しているけれど、それは悪い意味ではない) ことから+のイメージで捉えられていた。「異なったアプローチ」は *It depends on how you look at it* (どのように見るかによって変わる) ため+でも-でもないイメージとされていた。また

「男性のみ」は *If you’re trying at least to grow the sport or to introduce it to a new country, have it open to both gender.* (もし少なくともこの競技を発展させよう、新しい国に広めていこうとするなら、両方のジェンダーに門戸を開いた方がいいです) という意味で-のイメージで捉えられていた。

クラスター2の解釈

クラスター2を構成する項目は、Routine (必要要素)、Synchronization (同時性)、Focus on Competition Only (試合のみへの注目) の3項目であり、A 氏はこのクラスターを The Unique to Men’s RG from the Competitor’s Aspect (競技者の側面から見た男子新体操の独自性) と名付けた。「必要要素」は競技規則でも定められている、男子新体操の演技に必要な要素 (タンブリングなど) のことである。「同時性」は例えば団体演技で行われる、揃った動きを同時に行うなどのことである。これらは、’[Men’s RG is] very organized, there is some sort of the structure that you can follow, and yet there is still room for it to be unique.’ ([男子新体操は] 非常に組織化されていて、従えば良い構造のようなものがあり、しかし演技をユニークなものにするための余地もあります) と語られ、+のイメージとしてとらえられていた。一方、「試合のみへの注目」は、’everything is very, very, high level’ ([行われることの] 全てが非常にハイレベル) であり、’grassroots level’ (一般レベル) の参加者に目が向けられていないという点で-のイメージだとされていた。

クラスター3の解釈

クラスター3を構成する項目は、Dedication (没入)、Training (トレーニング)、Skill (スキル)、High-Level Performance (ハイレベルのパフォーマンス)、Physical Performance (身体的なパフォーマンス)、Comparison to Olympic Gymnastics (オリンピック競技の体操との比較)、Acrobatics (アクロバット)、Compare[sic] to Stunt Work in Movies (映画のスタントとの比較)、Power (パワー) の9項目であり、A 氏はこのクラスターを The Kind of Superficial Thing (表面的なもの) と名付けた。

A 氏は、これらの項目は男子新体操と聞かれてすぐに思いついたものであるが、男子新体操だけではなく他のスポーツにもあてはまるような言葉であると考えていた。「没入」「トレーニング」「スキル」「身体的なパフォーマンス」については、エネルギーと時間をどれだけ費やして練習するかといった

ことの重要性を表していると説明された。トレーニングに没頭した結果、スキルが上がって良いパフォーマンスが出来るようになることは、全体的に+のイメージで捉えられていた。

一方、「ハイレベルのパフォーマンス」は、クラスター2でも語られたレベルの高さを示しているが、先程は-のイメージで捉えられていたのに対し、ここでは0（どちらでもない）イメージで捉えられていた。その理由は、以下のように説明されていた。

You can appreciate how much work and dedication that takes it go to higher level of performance, but [...] other people think having focus only on high performance [...] may be stressful. (パフォーマンスのレベルを高めるような取り組みや熱意を良いと思うこともできますが、人によっては、レベルの高いパフォーマンスにだけ注目することにストレスを感じることもあります)

「オリンピック競技の体操との比較」は、女子新体操との比較という意味である。

You don't need to directly compare, but if you consider it to export in the future, using the Olympic rules, they would take away some of the things which makes it unique. (直接比較する必要はないけれど、もし将来的に男子新体操をオリンピックのルールを使って国外に広めようと考えたとしたら、オリンピックのルールは男子新体操をユニークなものにしている何かを取り去ってしまうことになるでしょう)

以上のような考えから、この項目は-イメージで捉えられていた。

「アクロバット」と「映画のスタントとの比較」は、男子新体操だけでなくダンスや武道、映画のスタントでも見られる、迫力ある動きや技を指しており、それらが男子新体操の持っている「パワー」だと説明され、+のイメージで捉えられていた。

MartialGym との比較

面接の終了時に、A氏がコーチを務めてきたMartialGymと男子新体操の関わりをどのように捉えているかを尋ねた。先述の通り、MartialGymは男子新体操と武道をもとにカナダでつくられた独自のプログラムであるが、A氏は、武道も男子新体操もそれぞれハイレベルなものであるのに対し、その両方から、誰にでも出来る部分を取り出して行

っているのがMartialGymであると考えていた。武道と男子新体操を融合するという意味ではなく、アクセシビリティを高めた形で両方を行うことができるプログラムであるということであった。

クラスは年齢別に、幼児・キッズ～大学生程度・成人・シニアの4クラスに分けられている。クラスによって目的は異なるが、例えばキッズや生徒を対象にしたクラスでは、自信を付けていじめを防ぐことが重視され、成人のクラスでは自信や得たものを仕事に活かすことが目指されるなど、通底する精神的価値もあることが紹介された。

It's more than just... you know, some people would like to keep in shape, but it's more like, you know, it teaches you a way you're looking at things. (それは単に…って言うよりももっと…、人によっては体型を維持したいということもあるでしょうが、でもそれはもっと[違う意味もあって]、それは、物事をどういうふうに見るかを教えてくれるんですね)

という言葉からも、精神的な部分の重要性が意識されている様子がうかがえる。

4-2. 筆者らによる総合的解釈 (A氏)

A氏は男子新体操の独自性を強く意識していることが結果からは読み取れる。とくにクラスター1やクラスター2は、男子新体操の独自性が強調される回答であった。全体の重要度順位を見ても、男子新体操が他の体操競技とは異なるものであることを述べた項目が上位3項目を占めている。それらは肯定的に捉えられており、男子新体操の独自性が失われて、競技内容が女子新体操や他の体操競技に近づいていくという仮定的状況は否定的に評価されていた。

野田・秦・菅・間野(2017)によれば、日本から海外に派遣された男子新体操指導者の中には、競技が国際的に普及する中で競技内容や競技規則に変化が起こることを危惧する者と、変化を受け入れるしかないと考える者がいた。男子新体操の独自性を失われるべきではないものとするA氏の見方は、少なくとも一部の指導者には共有されている見方であり、この結果からは文化的な差は見出されない。一方、A氏との面接では、競技者ならではと言ってもよい競技観が語られる部分もあった。一例を挙げると以下のような発言である。

野田: (※「身体的なパフォーマンス」に関して、

良いパフォーマンスには精神的な部分も必要だろうという趣旨の発言があったため、) 精神的なパフォーマンスも必要ということでしょうか？

A : Yes, and..., but although, from the audience's perspective, gymnastics is most obviously in the physical side, they don't necessarily understand or see the mental side.

(そうですね、でも、観客の視点から見れば、体操 [ここでは男子新体操] は言うまでもなく身体的な側面に属するもので、必ずしも精神的な面は理解したり見たりしていませんけどね)

とくに観客の視点と選手の視点の相違などについて尋ねた訳ではないにも関わらず、観客という視点とは明確に異なるものとしての選手という視点が強く意識された発言がここでは語られている。本研究では憶測の域を出ないものの、実際に選手として競技を行い、競技会への出場経験をもつかどうかによって競技に対する認識が異なる可能性について、今後さらなる検討が必要となるだろう。

なお、A氏は面接の中で何度か、'It's similar to B has said,' (B氏の言っていたことと似ているのです

が) などと発言しており、A氏の競技観にB氏が与えた影響がうかがい知れた。そこで次にB氏の解釈を見てみたい。

4-3. 被験者によるクラスター構造のイメージや解釈の報告 (B氏)

B氏はクラスターを4付近で5分割した(図2)。

クラスター1の解釈

クラスター1を構成する項目は、Language Barrier (言葉の壁)、Hidden Secret of Japan (日本の隠された秘密) の2項目であり、B氏はこのクラスターを Communication (コミュニケーション) と名付けた。

いずれの項目も、競技規則や日本国内で開催される競技会の情報が日本語のみで提供されており英語に翻訳されていないことへの批判的意識を表したものであった。また、この項目は、自身の取り組みが日本に知られていない状況も指している。

Everything. Everything. Competition rules,

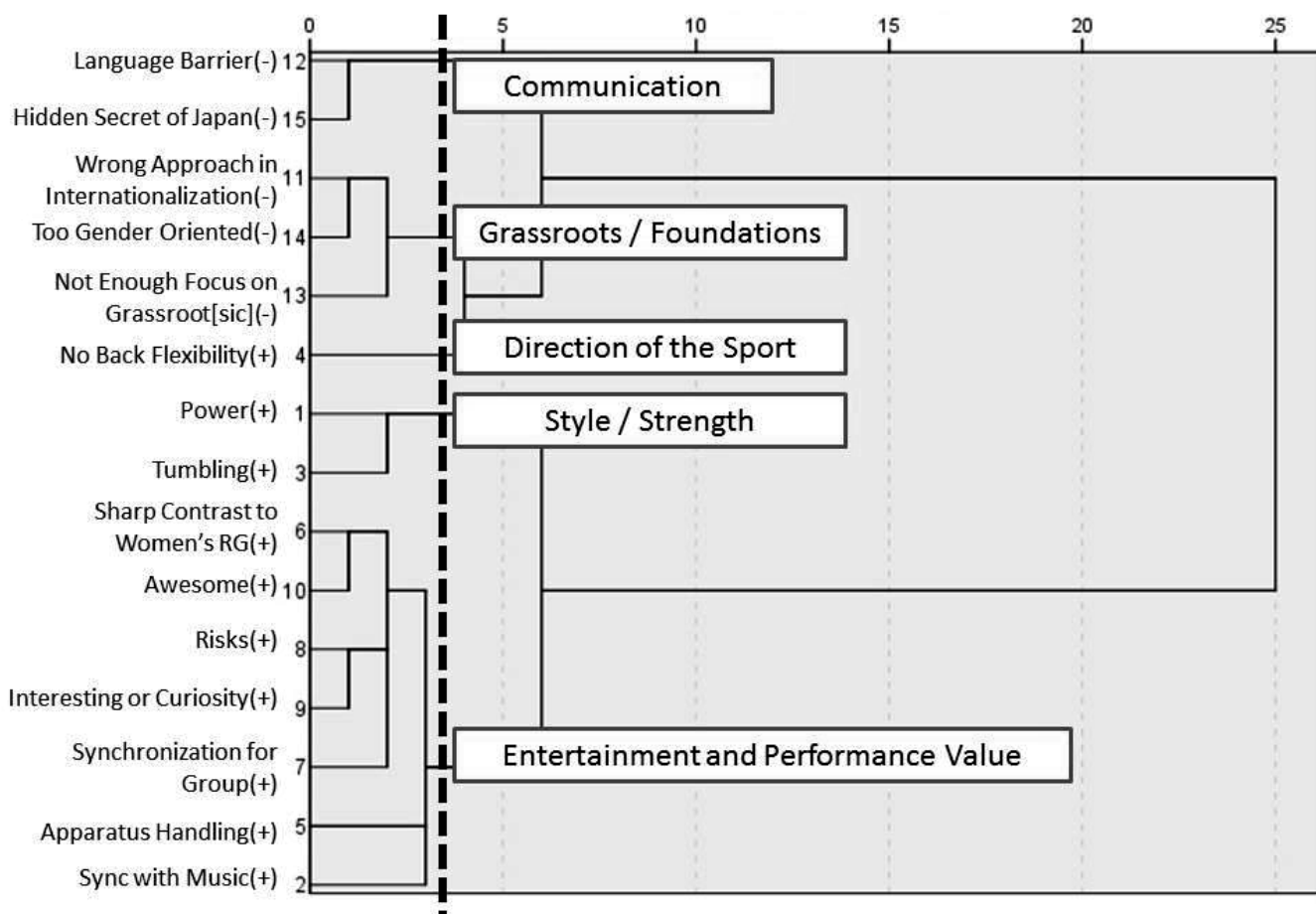


図2 B氏のデンドログラム

nobody knows, outside of Japan. If you ask around Japan, how many of them know that in Canada somebody's doing something like men's rhythmic gymnastics. And how many of them would basically think, "Here, I have a competition at the grassroots level, can I invite Canada?" Never. 16 years. Never got the invitation. (全て。全てです。[日本の] 競技規則も、日本の外では誰も知らない。もし日本の関係者に尋ねたとしたら、カナダで誰かが男子新体操のようなことをやっている人と知っている人が何人いるでしょうね。そして「[ハイレベルなものとは異なる] 一般向けの競技会を開催することにしよう。カナダを招待できるかな?」と[日本の関係者の中で] 考える人がどれだけいるでしょうか。一切ありません。16年間。誰からも招待されていません)

従って、クラスター1が「コミュニケーション」と名付けられた理由は、'The thing is that there is a gap in terms of the communication.' (要するに、コミュニケーションのギャップがあるということです) と説明された。

クラスター2の解釈

クラスター2を構成する項目は、Wrong Approach in Internationalization (国際化への間違ったアプローチ)、Too Gender Oriented (過剰なジェンダー指向)、Not Enough Focus on Grassroot[sic] (一般レベルへの注目の不足) の3項目であり、B氏はこのクラスターを Grassroots / Foundations (一般レベル/基礎) と名付けた。

「国際化への間違ったアプローチ」は、日本体操協会男子新体操委員会が2000年代に行った取り組みについての認識である。

Wrong Approach. That is, the lack of the plan. Spent too much money on performance, spent too much money on just doing an event. Zero grassroots. Zero translation. (「間違ったアプローチ」。これは、計画性がないということです。パフォーマンスにお金を使いすぎで、単にイベントを開催するのにお金を使いすぎでした。一般レベルには[予算が] 皆無。翻訳にも皆無)

これは「一般レベルへの注目の不足」にもつながる話である。B氏が繰り返し強調する grassroots (一般レベル) は、competitor (試合に出場する選手) との対比で語られる存在であり、A氏やB氏が取り

組む MartialGym が対象とする競技参加者である。男子新体操を極めて高いレベルで行うのではない、健康増進や楽しみのために行う多様な参加者に対する取り組みが日本側の計画には欠如していたことをB氏は何度も指摘していた。

「過剰なジェンダー指向」は、A氏の発言にも見られた、男子新体操が男性のみを対象にしていることを危惧する意識である。

The thing is that to follow the same approach is not going to work, and that is why you have to basically open it so that [...] the whole market much bigger. (つまり、[2000年代と] 同じアプローチでは上手くいかないのです。そして、だからこそ基本的に門戸を開いて市場規模を拡大するしかないのです)

以上のような問題意識から、ここでは「一般レベル」や「基礎」に対する意識の向上が競技普及には不可欠だとされた。

クラスター3の解釈

クラスター3は No Back Flexibility (腰の柔軟性がないこと) という項目のみで構成されていたが、B氏は、後述する「手具操作」「リスク」「女子新体操との対照性」といった項目とも関連あるとしていた。このクラスターは Direction of the Sport (競技のディレクション) と名付けられた。

女子新体操の審判を務めるB氏は、女子新体操選手が柔軟性にあまりにも価値を置きすぎると傷害や故障につながってしまうという現状を危惧している。そのため、とくにかつての男子新体操が背中・腰の柔軟性を評価の対象としてそれほど重視しなかったことを+のイメージで捉えていた。

In 2003, no back flexibility was good. But now, back flexibility is part of the sport. [...] In 2003 and 2005, no back flexibility, for men. I don't[didn't] see any of the routines. You see, in 2005, can[could] you do this? In top 10 routines, I don't[didn't] see anybody doing. (2003年には、腰の柔軟性がないことに問題はなかった。しかし今では、柔軟性が競技の一部になっています。[中略] 2003年や2005年に、私はどの演技でもそういうものを見ませんでした。2005年の試合に出たときに、[当時の出場選手だった] あなたにはそれが出来ましたか? 上位10位の演技では、誰もやっていなかったですよ)

これが「競技のディレクション」と名付けられたのは、どのような技や動きに点数を与える／与えないのか、つまり、女子新体操と同様の内容を選手に奨励するのか、女子新体操とは異なるものとしての男子新体操を奨励するのか、ということに関わるという意味である。

So we have to keep integrity of why we are good, why people see us as different. If people start basically to see from a far [and think that] men's rhythmic gymnastics is almost the same as women's rhythmic gymnastics, you can forget. (だから、私たちはなぜ自分たちが良いのか、違うのかに関して競技の整合性を保つていけないのです。もし人が男子新体操を遠くから見て、女子新体操とだいたい同じだと思ったら、人は[男子新体操のことを]忘れてしまうでしょう)

B氏はこのように述べ、近年では男子新体操も柔軟性が重視されており、女子新体操に近接しつつあるが、柔軟性を重視しないなど女子新体操との相違点を維持することでこそ競技の独自性を保つことができる」と指摘した。

クラスター4の解釈

クラスター4を構成する項目は、Power (パワー) と Tumbling (タンブリング) の2項目であり、B氏はこのクラスターを Style / Strength (スタイル/強み) と名付けた。「スタイル/強み」は、'What's men's RG... what impresses people.' (男子新体操とは何か、何が人々を感動させているのか) とも言い換えられており、男子新体操が独特にもつ魅力のことであると説明された。

「パワー」は武道などの力強さを指しており、タンブリングは男子新体操で行われているタンブリングのことである。ここでは「The thing is to make it appealing to not just men, to both women and men.' (男子新体操を男性だけでなく女性にも男性にも魅力あるものにすることが大事なのです) 'From my perspective, I want to see the difference between the two.' (私の見方では、両者[女子新体操と男子新体操]の違いを見たいのです) と語られていたため、クラスター3と同様に、力強さやタンブリングなどの魅力を男子新体操固有の強みとして打ち出したいという気持ちが読み取れる。

クラスター5の解釈

クラスター5を構成する項目は、Sharp Contrast

to Women's RG (女子新体操との対照性)、Awesome (素晴らしい)、Risks (リスク [※高い点数を得るために難しいことに挑戦するという意味の、新体操で使われる用語])、Interesting or Curiosity (興味深い、または好奇心)、Synchronization for Group (団体の同時性)、Apparatus Handling (手具操作)、Sync with Music (音楽との調和) の7項目で構成されており、B氏はこのクラスターを Entertainment and Performance Value (エンタテインメントとパフォーマンスの価値観) と名付けた。このクラスターに含まれる言葉は全て、'just adjectives' (単なる形容詞)、つまり男子新体操を形容する言葉であると説明された。

MartialGym との比較

B氏に対しても、面接の最後に、MartialGym と男子新体操をどのように関連しているものとして捉えているかを尋ねた。B氏は、MartialGym は武道と男子新体操の両方を取り入れてつくられたものではあるが、'I'm not getting them together.' (両者を合わせて[融合させて]しまおうとは思っていない) とのことであった。'I'm basically keeping those as development tools for the participants.'

(私は両者を、参加者の発達のためのツールとしているのです) というように、B氏はMartialGym のプログラムを通して、各年齢段階に必要なスキルを高めること(幼児やシニアは転倒防止の受け身を重視する、成人の場合は武道の要素を強めて精神力の鍛錬にもつなげる、など)を目指していると語った。

4-4. 筆者らによる総合的解釈 (B氏)

B氏の男子新体操イメージは、その大部分が日本体操協会男子新体操委員会が2000年代に実施した指導者派遣という取り組みへの批判的考察から成り立っていた。A氏とは異なり、B氏は競技内容や個々の演技にまつわる印象よりも、競技を国際化するための方策に対する自身の思いがはるかに重要性をもつことが読み取れる。これは、B氏が選手や男子新体操を習う一般参加者という次元からではなく、常に指導者・普及者という次元から競技に関与してきたという立場性が大きく影響していると考えられる。

同時に、B氏は男子新体操の今後の国際化についても極めて高い関心と問題意識をもち、過去に行われたものとは異なる方法で国際的普及のための取り組みが行われることが必要だという明確な主張をもっていた。その異なる方法については、男子新

体操を男性でも女性でも行われる競技とすること、後述するように力強さやタンプリングなどの魅力を前面に打ち出すことといったアイデアが語られた。

A氏同様、B氏も男子新体操の独自性を極めて重要なものと認識していたが、とくにそれは女子新体操と対置されるものとしての力強さとして認識されていることが読み取れる。とくにクラスター4において明示的に表現されている通り、B氏にとって男子新体操は力強く迫力のあるものである。MartialGym がつくられたことからわかるように、武道にも通底する要素をもつものとして男子新体操は位置付けられている。

さらに、とくにクラスター3の解釈に関する報告などに注目すると、B氏が独自性をもった競技として認識する男子新体操とは、現在の男子新体操ではなく2000年代前半の男子新体操のことであると推測できる。B氏にとって、とくに腰の柔軟性は男子新体操ではなく女子新体操の特徴であり、言わば男子新体操らしくない柔軟性が重視されることが、男子新体操全体の独自性を失わせてしまうことになると危惧する意識が読み取れる。

5. まとめ

本研究では、スポーツ競技が国際的に普及していく過程で競技規則や内容がどのように変化していくかを今後検討するための足がかりとして、男子新体操に注目した。本研究の目的は、カナダで日本の男子新体操と武道を元にした MartialGym プログラムを指導する選手や指導者が、日本の男子新体操をどのような競技として認識しているのか、日本の男子新体操の国際的普及に対してどのような考えをもっているのかを明らかにすることであった。

PAC 分析の結果、2名の被験者とも、男子新体操を独自性に満ちた競技として理解していること、他の競技に吸収されたり他の競技と合併したりすることなく、その独自性が維持されるべきだと考えていることがわかった。競技の何に独自性を見出すかについては、力強さなどのイメージが挙げられたが、とくにB氏は独自性が時代の流れの中で失われつつあると認識していた。

一方、日本の男子新体操に対する問題意識は、両者ともジェンダーと内容のレベルに見出していた。男性選手のみによって行われる競技であるというジェンダーの制限については、両者とも、男性でも女性でも参加可能な競技になるべきだと考えていた。内容のレベルについては、演技に含まれる技や動きがどれもハイレベルすぎることが問題として

認識されており、もっと一般的な (grassroots) レベルで行われる競技として参加可能性を高めることが必要だと考えられていた。

とくにB氏は、日本側が行った競技の普及活動に対する問題意識が高く、競技規則などの情報公開に消極的であること、競技の認知度を高める取り組みがパフォーマンスを観客に見せるイベントに偏っており一般向けの参加プログラムなどがあまり考慮されていないことなどの日本側の姿勢を、課題として捉えていた。

以上の分析結果からは、競技が国際化する過程において、競技の特徴や魅力に対する見方が共有されるかどうかという問題だけでなく、国際的な普及を目指して行われる取り組みの方法をめぐる認識のずれや意見の相違という問題も重要となることが示唆される。

本研究では、元選手であったA氏の語りは競技内容に、指導者として男子新体操に関わり続けたB氏の語りは普及活動の方法に比重を置いたものだった。この相違点からは、競技をめぐる認識が競技に関わる立場によって異なる可能性を見出すことが出来る。今後の研究では、立場性の違いに留意した分析が求められる。

参考文献

- 齋藤健司、2011、「競技スポーツ政策」菊幸一他編『スポーツ政策論』成文堂、183-212
- 内藤哲雄、1997、『PAC 分析実施法入門——「個」を科学する新技法への招待』ナカニシヤ出版
- 野田光太郎・秦美香子、2015、「男子新体操研究の概観と人文社会科学領域における研究の展望」『花園大学文学部研究紀要』47、95-113
- 野田光太郎・秦美香子・菅文彦・間野義之、2017、「男子新体操指導者海外派遣事業の分析」『スポーツ産業学研究』27(2) (印刷中)
- 町田光、2014、『『スポーツのグローバル化』について考える——日本におけるフラッグフットボールの普及活動』早稲田大学スポーツナレッジ研究会編『グローバル・スポーツの課題と展望』創文企画、8-27
- 和田由佳子、2012、「スポーツ組織におけるイノベーションの普及がスポーツ振興と組織の価値創造に及ぼす影響」2012年度笹川スポーツ研究助成

この研究は笹川スポーツ研究助成を受けて実施したものです。